

肥薩線鉄道開通の歌

渋川玄耳作

うだい きしやうくまがわ
宇内の奇勝球磨川の

美を集めたる大画幅
だいがふく

いおえ
五百重の山の奥深く

みよ
ひらくる御代の今日ここに

いわね
岩根をくぐる鉄道の

ばんこ
万古の夢はさめはてて

えんがんじゅうよりさんすい
沿岸十余里山水の

みよ
造花の妙をもらさじと

雲のとばりに秘めたるを
神秘の扉破れたり

さんれい
汽笛の声に山霊の

人のたくみに驚かむ

きよこの発言II芳名録

(渋谷敦、郷土史家)

人吉のホテルN屋さんの宿泊客「芳名録」は、昭和になつてからでも与謝野晶子や山本五十六や海老原喜之助や、中には湯の宿の焼酎に酔つてかいた戯画や俳句などもあつて、拝見しながら楽しいことこの上ない、中に、大正二(一九一三)年一月に泊まつたドイツ帝國鉄道院勅任官雇オットーウイトフェルト夫妻ら四人は「真冬に球磨川の急流を下ることができたが、われわれはここに、この川下りが四季を通じて可能であることの証明として連署する」と記帳している。

これは「冬の球磨川下り」の第一号として記録に値するものだが、よもや単なる観光客だつたはずもなく、四年前に開通した肥薩線(当時は鹿児島本線)のループ線やスリッチバックや長大な矢岳トンネルなど、特殊な山岳鉄道の工事の視察に来た人々だと、私は長い間独りで決め込んでいた。

ところが最近、横浜のMさんと人吉のFさんが口をそろえて「山登り専用機関車と関係がある」と言い出した。お二人によると、「ドイツマフアイ社製四一〇〇型機関車が輸入されて千分の三十を超す急勾配の奥羽本線庭坂―米沢間を走り、その改良四一〇〇型が人吉―吉松間に配備された。当時アメリカ製機関車が主力だつたところに、このドイツ製機関車が殴り込みをかけてきた訳で、「冬の球磨川下り」をしたドイツ人たちは、多分その殴り込みの技術者一行だつたに違いない、というのである。なるほど勇敢だつた訳だ。

郷土史に限らず、個人の力は知れたもので、多くの知恵と力を結集すれば何倍もの収穫が上がると思つた、それにしても徳川の中期、米沢の殿様上杉治憲と人吉の殿様相良晃長は日向高鍋出身の兄弟で、ともにドイツ製機関車の力を借りねばならぬ山深い藩にそろつて養子に出た、ということになる。

熊本日新聞
一九九七年五月十五日夕刊から転載
発行にあたり、鍋屋さんで拝見させて頂き、渋谷敦先生に掲載許可を頂きました。

肥薩線開通、大八車搬送…「読者に支えられ」

熊日多良木販売センター(球磨郡多良木町)が創業百周年を迎えた。熊日前身の九州日日新聞と販売契約し、人吉市内に店舗を構えたのが一九〇七(明治四十)年八月。以来一世紀、県内で新聞販売業をこれだけ長期間続けてきた例はない。

創業者は現店主の小出忠紹さん(六二)の祖父の故政喜さん。熊本―三角間を結ぶ九州鉄道三角駅に電信員で勤め、九州日日新聞への記事送信と芦北地区への販売を兼務。鉄道が運んできた新聞を汽船で田浦、佐敷、水俣などの港に送つていた。

人吉市五日町に九州日日新聞を扱う「小出新聞店」を創業した翌年の一九〇八年、国鉄八代―人吉間(現JR肥薩線)が開通。迅速な新聞配達が可能になるのを見越した開業だつた。

全国紙とも相次ぎ販売契約を結び、鉄道開通直後の取り扱いは、



車ない時代

(人吉駅に到着した新聞を積み込んで販売店へ運んだ大八車)

発行にあたって

肥薩線開通前の新聞は、球磨川の船で搬入されてきました。列車に替わっていき早くなくなり、陸の孤島ではなくなり新しい時代が開幕した訳です。新しい情報が都市と田舎の距離を縮めたので、その当時は大八車搬送を再現実、皆さんに見て頂きたいと企画しました。鍋屋様、青柳様、た。鍋屋様、青柳様、渋谷敦様、立山商店様のご協力により実施できましたこと、心より感謝申し上げます。

小出忠紹

小出政喜の手記より
汽車開通を機会に人吉には種々の行事があつた。二月二十五日には実業クラブの発会、三月二十日には青年会の発会式、十月十六日には、東京大相撲で常陸山、梅の谷の取り組みがあつて全郡を熱狂させ、十二月には本願寺別院の開院式がある等、通信材料は豊富であつた。

人吉―八代間の汽車開通は六月一日でその前の五月三十一日は落成式、翌一日が開通式で、球磨全部の有志はその式に招待されたが、服装は紋付き羽織りか、フロックコートで無いと礼を欠ぐと誰が言ひ出したものか専らの話で、その為フロックの洋服注文が殺到し、高橋洋服店は夜業々々で悲鳴をあげた。その後あらゆる機会には、フロックが大流行になつた。開通祝賀会の折り詰めにバナ

ナが入つて居たが、バナナと言うのは初もので、皮をむいて食べるのがわからず輪切りにして食べたのが多数であつた。

六月一日の新聞は…
相良氏三十五代六七〇年の居城にて、橋南溪が鹿児島・津軽と併せて日本三名城と称賛したるもの、球磨川の流れあいをたたえるところ石垣高く峙ち、老木参差、雄鹿あわせ得て風景甚だ愛すべしとして、肥後人吉城跡の写真を大きく入れ、渋川玄耳氏の鉄道開通及び、人吉町の駅が掲載された。